



早生樹遺伝資源の利用促進に向けて

遺伝資源部長 山田 浩雄

令和3年度は新たに策定された「第5期中長期計画(令和3年度～令和7年度)」のスタートの年度でした。林木育種センターでは、林野庁の林木ジーンバンク事業を通じて、スギ、ヒノキ等の主要な造林樹種の育種素材や絶滅が危惧される希少種等に加えて、早生樹や有用広葉樹の探索・収集、増殖・保存、収集した遺伝資源の特性評価等を進めて参りました。特に中長期的展望に立って、社会的ニーズを的確に捉えて林木ジーンバンク事業を戦略的に進めることとしており、新需要の創出等に貢献する林木遺伝資源の充実と活用の強化のため、早生樹として期待されているコウヨウザン、センダン、ユリノキ、チャンチン、オノエヤナギ、ドロノキ、ヤマナラシ等を対象に収集、保存及び特性評価を進めました。

早生樹はその成長の良さから、下刈り回数の縮減等による造林の低コスト化、短伐期施業による林業の採算性の向上、森林の炭素固定能力の強化等が期待されており、最近注目を集めています。コウヨウザンはスギやヒノキと同等の材質を有していて、建築材や合板、LVL等として利用が可能であること、センダンやチャンチンは家具材として、また、オノエヤナギ等のヤナギ類はバイオマ

ス燃料としての利用が見込まれており、この度の早生樹への注目は、生産される木材の利用途も合わせて検討されていることに特徴があり、新たな需要の創出に結びついていると考えています。

一方で、これまでも早生樹が注目され、早生樹造林が何度となく試みられてきましたが、成功事例は多くありません。これは立地条件によって成長が大きく変化する早生樹を広く造林しようとしたことや、植栽する苗木に係る知見が得られていなかったこと等が原因と考えられます。そこで林木育種センターでは、早生樹遺伝資源の収集、保存だけでなく、利用を促進するための特性評価として、早生樹造林に興味をもつ関係機関や民間企業と連携して、産地・系統の明らかな苗木を立地条件の異なる複数の箇所に植栽する試験を進めています。この試験を通じて、どの産地・系統の苗木をどこに植栽すれば良いのか等、それぞれの早生樹がもつポテンシャルを最大限に引き出し、成長のパフォーマンスを最大化するための方法を提示したいと考えています。

今後も林木遺伝資源の利用促進に向けた取り組みを進めて参りたいと考えていますので、皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

【紙面紹介】

令和3年度に開発した優良品種……………	2～3	林木遺伝子銀行110番……………	6
フクギ(<i>Garcinia subelliptica</i>)の挿し木苗生産の実用化について …	4	令和3年度林木育種成果発表会を開催 ……………	7
ヒノキの薬剤感受性に関する遺伝的特性……………	5	特定母樹等育成温室の紹介……………	8



国立研究開発法人 森林研究・整備機構
森林総合研究所林木育種センター

Forest Tree Breeding Center, Forestry and Forest Products Research Institute